

エディトリアル

地域医療振興協会 地域医療研究所長 山田隆司

今回は鹿児島県の離島医療の特集である。

まず総論として現在協会のシニアアドバイザーである宇田英典先生に鹿児島県の離島医療の概況をご報告いただいた。鹿児島には南北600kmの広大な海域に26の有人離島があり、島々にはそれぞれ固有の特性があって、それに応じた対応が求められるという離島医療の実情、困難さが紹介されている。

県行政の立場からは医療審議監である中俣和幸先生から、各離島での医療確保に関する課題や人材確保に向けての取り組みなど、広域にわたる鹿児島県としての支援の現状をご紹介いただいた。

県立大島病院の森田喜紀先生には離島で働く医師のための卒前・卒後研修の取り組み、その工夫をご報告いただいたが、鹿児島の離島医療の拠点としての役割を踏まえそれを魅力として訴える積極的な取り組みが紹介されている。

鹿児島赤十字病院の福留啓吾先生には三島・十島への巡回診療の実情をご報告いただいたが、特に無医島でのICTを活用した取り組みや看取り対応での課題など、超高齢化社会の近未来へ向けて示唆に富む報告となっている。

加来利成先生には奄美大島南端、離島を含む瀬戸内町での巡回診療車を活用した取り組みなどをご紹介いただいたが、医療や介護の担い手も不足する島ならではの課題や苦勞が語られている一方で、島の経験でこそ得られた価値が語られている。

鈴木済先生には長い間離島の一人診療所医師として勤務されてきた実情をご報告いただいたが、拘束のストレスを抱えながらも島民として暮らし、地域の医師として仕事をする豊かさが伝わってくる内容となっている。

名瀬徳洲会病院の松浦甲彰先生には、奄美の島々の医療を病院グループとして守り維持してこられた歴史についてもご報告いただいたが、離島医療ならではの幾多の苦勞を引き受け、それを原動力に島を守ってこられた先生方の気概、心意気がヒシヒシと伝わってくる内容となっている。

離島医療の現場では大なり小なり医療資源に限界があり、限られた医療環境での対応が求められる。必要とされる高度医療への転送にも制約がある。医療以外にも生活支援や介護に関する人材、施設も乏しい。さまざまな制約の中、医師は受け持つ医療の範囲が広ばかりでなく、生活支援や介護も含めた対応が求められる。医師はそれぞれの環境に即し、地域ニーズに柔軟に対応する能力、まさに究極の総合医としての役割が求められる。

離島は時には自分の能力を超える事態に直面してもまずは対応せざるを得ないという、医師にとってある意味最も過酷な環境にしばしばさらされる現場でもある。しかしまずは逃げずに対応して最善を尽くす、そこから活路を見出す、それを繰り返すことで学習するという臨床医としてかけがえのない成長が期待できる最善の環境でもあると言って過言ではないだろう。

離島を守る医師の生きがい、豊かさ、それぞれの医師の卓越したプロフェッショナルリズムが各論文から滲み出ており、素晴らしい特集となっている。本特集から離島医療の魅力を感じるとともに、離島医療の真価を学びとっていただきたい。